

名 誉 会 員 追 悼



故 名誉会員 館 充 先生

社団法人日本鉄鋼協会名誉会員、東京大学名誉教授、工学博士 館 充 先生は、平成 23 年 10 月 29 日に逝去されました。享年 89 歳でした。ご逝去の報に接し謹んで哀悼の辞を申し上げます。

先生は昭和 20 年東京帝国大学第二工学部冶金学科をご卒業後、秋田鉱山専門学校講師を経て昭和 25 年東京大学第二工学部助手、昭和 36 年東京大学生産技術研究所助教授、昭和 41 年東京大学工学部教授、昭和 43 年東京大学生産技術研究所教授に就任され、昭和 57 年に東京大学を停年退官され名誉教授となりました。その間、昭和 36 年に工学博士の学位を取得されております。東京大学退官後直ちに住友金属工業（株）顧問に就任され、昭和 62 年まで勤められました。昭和 62 年に千葉工業大学工学部教授に就任され、平成 4 年に同大学を停年退職されました。

東京大学生産技術研究所においては金森九郎教授の後任として試験高炉を用いた製鉄研究に従事されました。当時本会の中に試験高炉委員会が設置されており、そこに大学側委員として参画され試験高炉の研究テーマを単に大学側の興味に限定せず産業界の方々と協議して決定する役割を果たされました。産学共同研究は今日では当然のこととして受け止められておりますが、当時の産学共同研究全般が世間の一部学生から批判を受けており、そのような環境の中での研究運営にはなみなみならぬご苦労があったことと拝察申し上げます。試験高炉の代表的テーマには複合送風、送風限界などの炉内反応に関すること、コークスや鉱石の力学的挙動などの原料関係がありますが、これらの研究の中で生まれたものに試験高炉の解体調査や稼働中の炉内に各種のゾンデを挿入して高炉の動態観測を可能にしたことがあります。これらの業績は、世界における高炉研究に大きな刺激を与えました。また、試験高炉は研究面だけでなく教育面でも大きな業績を残しました。すなわち、29 回に渉る試験高炉操業の門戸を国内各大学の学生と若手教員に解放し、現在鉄鋼界で活躍する多くの人材を輩出しました。また、日本学術振興会では製鉄第 54 委員会高炉化学工学的研究小委員会の小委員長を勤められ、高炉内の移動現象に関する研究の進歩に貢献されました。

試験高炉を通じての研究だけではなく、鉄の歴史の分野でも大きな指導力を発揮されました。昭和 40 年代後半に本会の中に鉄鋼科学・技術史委員会を立ち上げ、第 2 次世界大戦後のわが国における鉄鋼技術の発展に考察を加え、日本の高度成長を支えた技術の役割を明確にされました。その後平成 10 年代になって本会に社会鉄鋼工学部会が設立されその傘下に「鉄の歴史」フォーラムが発足し、先生が初代のフォーラム座長に就任されました。このフォーラムの活動の中で日本および中国の金属技術の歴史に関する文献を読破され、また後進が理解できるよう日本古来の製鉄の古典文献を現代語に訳されたり中国語文献を翻訳し出版されました。

以上のようなご業績に対し、俵論文賞、西山記念賞、野呂賞、山岡賞、製鉄功労賞などが授与されております。本会においては評議員や理事を複数回、各種委員会委員と委員長を多数回勤められました。これらの鉄鋼技術・学術・教育への多大なご貢献により平成 8 年に名誉会員に推挙されています。

先生の鉄鋼技術、学術分野への多大なご業績と、本会の発展になされたご貢献を偲び、会員一同、心からの哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成 23 年 11 月

日本鉄鋼協会 会長 友田 陽